
新しい大日本帝国史

草加

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新しい大日本帝国史

【Nコード】

N4514T

【作者名】

草加

【あらすじ】

工業エンジニアの真田雄二は1935年にタイムスリップしてしまった！？

はたして真田は日本を敗戦から救えるのか！

序章（前書き）

はじめまして、草加です。

この小説は一年前から少しずつ書いてきたもので、表現の至らぬ所も多々ございますがご容赦ください。

序章

「……これ今日中に終わるか？」
と、

真田雄二25才

（職業エンジニア、彼女なし 趣味 某第二次世界大戦戦略級シミュレーションゲームで日本対世界で殺りあう）
は目の前にある仕事用のパソコンの画面を見ながら言った。
画面の中には様々な数式やグラフが所狭しと並んでいた。

これは仕事で明日までに出さなければならぬ試験結果の資料なのだが、どう考えても間に合いそうにない なにせまだ半分近く残っているのだ。

「……とりあえずコーヒーでも飲もう」

そう言いながら俺は階段を降りた
いつもならリビングに入ると両親が結婚しやがれとうるさいが今日は温泉旅行で居ない、もう50前なのにお熱いことである。

なので少なくとも今日はこの築35年一戸建ての主だ
コーヒーを飲みながらこないだから新しく進めている戦術級シミュレーションゲームについて考える。

（仕事が一段落したらレイテ沖海戦を題材にしたマップでもつくるか、そうなるとまた地図を出さないとな）

普通の人が聞いたら物騒だと言われそうなことを考えながらまた階段を上がる。

その時

ガタガタガタ

突然地震が襲う

「げっ」

俺は足を滑らせた

ドターン！

俺は頭から落ち　そこで意識は途切れた

ダンドンダン！

俺はその音で目を覚ました。

壁に掛けてある時計を見る。

さっきまで午前を指していた短針は午後に傾いていた。

「げっ！2時間もこんなところに転がってたのか！！」

ヤバイ！！まだ仕事片付いてないのに！！

俺は焦りつつも、さっきからドアをたたいてくるので玄関へむかった。

「すみません、どちら……」

俺は思わず固まった、

玄関先にいるのは3人の男だった。

それだけならいい、しかしその手には拳銃が握られている。

服もなんだか見覚えがある軍服だ、

「……………は？」

すると真ん中の男がサッと銃を構える。

強盗か！？

俺はそう直感し懐に入る、

襟をもち袖をとり、背中に相手に乗せる、そして一気に前に引っ張る！

「しまっ！」

ズダーン！

背負い投げである。

中学から大学まで柔道をしていた。久し振りにやったが腕は鈍ってないらしい、左右の2人が驚いて銃を構えるがこちらは投げた奴をそのまま引っ張り上げ盾にした、勿論銃も奪い取る、すると投げた奴がかすれ声で喋った。

「無駄な抵抗はやめろ。もう直ぐ保安部隊がくるからな、早めに投

降すれば命は
助けてやる」

「？意味が分からんおまえら強盗だろ？保安部隊が来られて困るのはお前らの方だ
、てか保安部隊ってなに？」

軍服姿の三人は顔を見合わせた。

「貴様、意味のわからん事を言っつて誤魔化そうとするな、海軍省に
一夜にしてこんな物を建てて自分の家と言いつ張るつもりか？」

海軍省？大日本帝国時代でもあるまいし、おれが時空転移してきた
とでも？

そこにきて俺は周りを見る、目の前にはヨボヨボのじーさんがやつ
てる定食屋があるはずだ、いつも何かブツブツ言いながら鍋をかき
回していて、あそこで食べると寿命が縮むつて噂。

しかし、ないそれどころか道路もレンガが混ざっているし何故か塀
が見える。

「……………ここは何処で、西暦何年だ？」

「大日本帝国、海軍省敷地内で1935年12月20日だ、そんな
こともわからんとは、頭でも狂っているのか？」

男は呆れ顔で言い張る、嘘をついている顔ではないようだ。

(……………落ち着け自分……………！ここは海軍省？しかも1
935年の年末？つて

ことは2・26事件の約3ヶ月前！?)

俺は破裂しそうな頭を抑えながら盾にしていた男に、

「わかった降参だ、ただ一つ、米内さんに一度でいいから会わせて
くれるように

してくれないか」

序章（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

重臣との邂逅（前書き）

第二話投稿です。

連続更新しましたがこれからは週一、日曜投稿にしようと思います。

重臣との邂逅

「何だあれは？」

米内は車から降りて気が付いた、海軍省の建物の横に西洋風の二階建ての建物が建っており、玄関先に警備の兵士三人とやけに体のデカイ男がいた、よく見ると男の方は手を上げている。

「あんな物、昨日までは無かったはずですが……」

運転手がつぶやいた、

米内はなにかあると思い、運転手に様子を聴いてくるように言った。

運転手が近づくと、

「そんな事できるはずがない！貴様は海軍を舐めているのか……！」

「舐めてたらこんなこと頼まん！」

と言い争う声が聞こえた

「あの一」

『なんだ！』

「ひっ、あ、あのすみませんが、これは何をしているのでしょうか？」

兵士は運転手を見ると渋々といった感じで、

「こいつが米内大将に会わせるとしつこいんだ」

すると男が

「国家の存亡に関わる出来事なんだ！

この国は3ヶ月後に陸軍若手将校のクーデター事件で軍部に政権を掌握され始め、日中開戦！ドイツ、イタリアと同盟を締結し、今から六年後に対英米戦に突入し、四年間の激闘の末、敗戦を迎えることになるんだぞ！？」

運転手はそれを聞くと悪寒が走った、いつも政治家を乗せているからか、政治については一般以上の事を知っている。

確かに軍部が政権を握るとろくな事にならない。しかも、陸軍の若手将校の間で動きがある、という噂が上層部の間で囁かれていると前に聞いた事がある。

「すぐに来てもらうようお願いしてきます！」

「なっ！？」

「話が早くて助かる！」

兵士が突然のことに呆けている間に運転手はの方へ走っていった。

「なに？陸軍による政権掌握の可能性が言っている？」

米内はまさかと思った。

たしかに『陸軍の若手将校が暗躍している可能性がある』との噂が

あるらしいが、あるとしても、せいぜい地方で内乱を起こして国民に支持を訴える程度だろう。
と考えていた。

しかし、万が一帝都でクーデターを起こされた場合、政府は新たなクーデターを恐れ、軍部に対して及び腰になり、政治の主導権を失ってしまう可能性は否定できない。

そう思うと背筋が寒くなった、考え過ぎかもしれないが、一度考え始めるとどうしても気になってしまふ、少々怪しいがその男が何か情報を持っているかもしれない。

「わかった、執務室に連れて来るようにその兵士に伝えてくれ、勿論、まだ信用した訳じゃないから手錠を付けてくれ」

そう言いながら海軍省の中へと歩いて行った。

米内は知らなかった、この出会いが日本、いや世界を変える事となることは……

重臣との邂逅（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

歴史の真実（前書き）

今回っていうか2、3週はこんな感じですよ。

歴史の真実

「ちっ、なんで俺がこんなこと……」

「仕事だろ？」

「それはそうだが……」

「なら文句言っな、仕事と私情は分けて考える」

「む…、わかった……」

俺と兵士が話している内に執務室に着いた、兵士はノックをした。

「閣下、男を連れてきました」

「ありがとう、下がってくれ」

「しかし、この男は何をするかわかりませんが……」

「そのために手錠がついている」

兵士は渋い顔をして、下がっていく。
するとドアが開いた。

「入ってくれ」

執務室にはいると、あちこちに書類や本の束がある。
米内は苦笑して、

「大掃除の途中でね、こんな風になっているがほかに場所がないんだ、座ってくれ」

俺は応接用のソファアに腰をおろした。

「コーヒーしか無いんだが…」

「いえ、飲めませんから」

自分の腕を上げてみせる。

「そうか、すまんね、それと君の名前を覚えてくれるかい？」

「真田です」

「では真田君、君は陸軍によるクーデターが起こる事を知っているそうだね」

「はい、今から約3ヶ月後の2月26日に帝都内の政治中枢のほとんどが占拠されます」

「ほっ」

米内はやはりといった顔をする。

「このクーデター自体は3日で鎮圧されますが、この事件以後、政府官僚は再発を恐れるようになり、統帥権干犯問題などとあいまって、政治の主導権を軍部に握られはじめます」

「…待つてくれ、君はさも未来を見て来たかのように喋るが何故そんなことがわかるんだね？」

(やはり聞かれたか、だが躊躇う訳には…！)

「……………実は、自分は未来から来たのです」

米内には頭でも狂っているのかと思われてる事だろう。

「ふむ、証拠はあるのかな？」

「はい、自分のズボンの右ポケットにある機械があります」

すると米内はポケットを探った。

「これかね？」

「そうです、渡してもらえますか？」

「うむ」

「どうも、これは携帯電話というものです」

俺は携帯をあけ、プレイヤー機能を呼び出した。

「この携帯電話といわれるものはその名の通り携帯式の電話機で、本来なら世界中に設置されている中継局や宇宙に浮かんでいる衛星を通して、例えば地球の裏側に居たって日本とリアルタイムで会話出来るのです。」

ただ、この時代にはないのでかなり機能が制限されます。

試しに音楽を流してみましよう」

俺は軍歌の中から『軍艦行進曲』を選んだ。

「おお！」

軍艦行進曲独特の音色が聞こえてくると米内はとても驚いた様子だ、当たり前だろう、この時代ではあのデカイレコードが使われている、こんな小さな物から音楽が流れること自体おかしいのだ。

「これで信じてもらえるでしょうか？」

米内は観念したように言った。

「わかった信じよう」

「ご理解感謝します」

「しかし何故転移してきたのかね？」

「わかりません、地震で階段から落ちて気を失ってしまい気付いたらこの時代に…」

「そうか、我々日本はこれからどうなる？」

「日本がこのまま進めば、クーデターにより政治の主導権を軍部にとられた政府は昭和十二年に関東軍の謀略によって起こった日中戦争を止めることができず、中国に利権を有する英米とさらなる対立を招きます。

昭和十五年、ドイツ第三帝国、イタリアと共に日独伊三国同盟を締

結し、英米との関係は絶望的になります。同年、欧州で第二次世界大戦が勃発し、ドイツがフランスを屈服させ、日本は仏印に進駐します」

「ふむ、仏印を手に入れるのか」

「しかし、これに対して米国はあらゆる種類の鉄くず、鋼鉄の輸出禁止措置、在米日本資産の凍結、トドメに石油輸出禁止という強烈な経済制裁を発動します。

その後、約1年間交渉を行いましたが出ず、対米英蘭開戦を決意します。

昭和十六年十二月八日に始まった太平洋戦争は当初の予想に反し、四年間の長期戦になります。

詳しい説明は省きますが最終的には日本は爆撃によって焼け野原になります。

軍人はもちろん、民間人にもおびただしい犠牲を出し、昭和二十年八月十五日、日本は敗北します」

ふと見ると米内は疲れたように目頭を押さえていた。

「……………避けねばなるまい……………」

「はい、必ず」

米内は固く決意した。

そのような未来は避けねばならない、歴史を変えねばならない、と。

歴史の真実（後書き）

松島基地のF-2、再生可能らしいですね。

自分的にはF-XはF-2がよかつたなってます。

ご意見、ご感想を書いていただけると作者が飛び跳ねながら喜びます。

会談終了（前書き）

今回は少し短いですね。

現在、登場予定の艦艇の最終調整中です。

なにかアイディアがあれば感想の方にどうぞ、使つかどうかはわかりませんが。

会談終了

俺は米内が落ち着くまで待った。

「すまない、予想はしていたがまさかここまでとは……」

「いえ、こんな事を聞いたら仕方ありません。とりあえずこの手錠を外してもらえませんか？ 続きはそれから」

俺は腕を見せつつ言った。

「おお、すまん」

米内はポケットから鍵を取り出した。

ガチャン

腕が自由になる

「さて、君はそうなると日本はどうすればいいと思う？」

「そうですね、まずクーデターを抑えなければなりません。

そのためにはまず首謀者を捕らえるのが一番です。

首謀者はすでにわかっているので難しくありませんし、首謀者が居なければ計画は瓦解します。

それと満州国についてですね、欧米諸国に資金注入を許可すればあるいは認証してくれるかも知れません。

それも無理なら中国の国民党に返還します。

関東軍がなんと云うか分かりませんがね、さらに武器弾薬の援助を約束すれば日中関係が修復出来るかもしれませぬ」

米内は頷きながら聞いていた。

「なるほど、それはいい案かもしれない」

「ありがとうございます。」

しかし対米戦を回避する可能性は低いと言わざる負えません」

「何故だね？」

「それは米国が戦争を欲しているからです。」

ニューディール政策によって多少マシになっていますが、あの国は未だ恐慌の影響から抜け出していません。

早く不況から抜け出したい、そのためには戦争が一番手っ取り早いのです。」

さらに我が国の後ろには巨大な市場たる中国が有るのです。」

例え一度避けられたとしても直ぐに難癖を付けて戦争を仕掛けてくるでしょう」

米内は青ざめていた、どちらにせよ日本は滅ぶのではないか？と言いたそうであった。

「心配しないで下さい、まだ時間があります。」

これからのいい方法を考えていけばいいではないですか」

「確かにそうだな、少し内気になっていたようだ」

「それにもし戦争になることになってもいいように今から工業力を強化して少しずつ軍備を拡張していきましよう！幸い自分は技術者ですし、家には自分の趣味で集めた様々な兵器の設計図があります。これらを上手く使えば戦争に勝つまでは行かなくても講和まで持つ

て行く事も出来るかもしれませんが」

これは事実だ、自分は主に車用エンジンの開発に関わっていた、それに家には自分や半導体研究者の父親が持っていた専門書、パソコンにはあの手この手で集めた艦艇や航空機の詳細な設計図がある。これらがあれば米国相手でもまず負けることは無いだろう。

「そうか、君は未来の技術を持っている。それならなんとかなるかも知れないな。

真田君、日本を、国民を頼む…！」

そう言いながらは握手を求めてきた、これは信頼の証だろう、俺は迷わずそれに応じた。

「自分がどれほどお役に立てるかわかりませんが、精一杯努力させてもらいます！」

こうして世界は動き出す、この男の存在は世界をさらなる戦乱の渦に巻き込むのか、それとも人類の発展の手助けになるか、それは今の所神のみぞ知るところである。

会談終了（後書き）

感想は作者のやる気の源です。

会合（前書き）

最近筆が進みます。

あと短編のネタを思いついたのでちよくちよく書いています。

そのうち投稿するかもしれないので、もしよろしければ読んでください。

会合

その後も何時間か米内と話しあった。

大戦から自分の居た年までの大体の歴史と、自分の身の振り方である。

米内としては海軍省の敷地内に家を構えるのはあまり好ましくない為、あの家は取り壊しするか移築するのがいいらしいが、住み慣れた家を壊すのは忍びないし、様々な技術が使われており、後々役に立つかも知れない。

移築するにも今の日本にこの家をばらして組み立てる何てこと出来るとは思えないので、このままにしてもらうことにした。

幸い、電気はソーラー発電だし、小型の発電機が何台か裏の倉庫にあつたのですぐに解決した。

結果、自分は前とほぼ変わらない住環境を手に入れた。

違う点と言えばネットに接続出来なくなり、コンビニがなくなったぐらいだ。

水道はすぐに引いてもらえるらしいし、オール電化なのでガスもいらない、というか元々料理はしないのであってもなくても変わらない。

転移して1週間後

「今日は何人が会って欲しい人がいるんだ」

車で移動中にノートパソコンの説明をしている自分に米内はそう言った。

「へえ、誰ですか？」

「いけばわかるさ」

誰だろうか？ 転移してからまともに知り合ったのは米内とその秘書の数名ぐらいなのでいくらでも候補は出る。

車は料亭の前で止まる、自分と米内が中にはいると女中が奥に案内した。

「……………え？」

襖を開けるとそこには政府要人、陸海軍の重鎮はもとより、経済界の大物、財界人の首領など、まさに今の日本を動かしていると言っても過言ではない人物たちが揃っていた。何人かは顔写真で見たことがある。

「こ、これは……………！？」

「ああ、真田君から話を聞いた後に集まってくれよう頼んでね、全員集まって欲しかったから予定を調整してもらって今日になったんだ」

「そうではなくて……………」

「この集まりについてかね？」

「そうです！ 何なんですかこれは！ 納得のいくように説明して下さい！」

すると陸軍服を身に纏った年をとった人物が、

「まあ落ち着きたまえ、別に不思議は無いじゃろ？」

満州事変以降、我が国は世界的に孤立の道を歩んでおる、そんなときに各自バラバラに動いてもどうも出来ん、そこでこうやって集まり、我が国のこれからの方針を話し合う場を設けとる訳じゃ」

驚いた、確かに米内が自分に会って欲しいと言うぐらいの人物だしある程度覚悟はしていたが、まさかこんな集まりがあるとは……

「……わかりました。それで自分は何をすれば良いのでしょうか？」

すると奥で腰掛けている背広姿の人物が、

「君は未来から来たそうだが、そうになると未来の技術を使った物を持っているのだろう？」

「はあ」

「米内さんから聞いた携帯電話以外にも何か見てみたい」

どうやら未来の日本や技術はある程度米内から知らされているようだ。

「携帯以外ですか、そんなこと突然言われても……」

するとが、脇に挟んでいる物を指しながら、

「これでいいんじゃないかね？」

この『ぱそこん』と言うものは携帯電話よりも色々な事が出来るの
だろう？」

「そうですね、これでいきましょう」

俺はそう言いながらノートパソコンを起動し、縦スクロール式シューティングゲームの保存してあるファイルを開いた。

操作方法を説明し、それぞれやってみてもらった。全員驚いた顔をしており、このような物が日本中の家庭にある、と説明すると更に驚いていた。

「未来の技術は凄いな、このような物が日本中にあるとは」

「全くですな」

「これなら米国にも勝てるかもしれん」

「過信してはなりませんぞ、あつちには物量がある」

なかなか騒ぎが収まらない。

米内が、

「皆さん、そろそろ本題に移りませんか？」

と言いやつと静かになった。

会合（後書き）

皆さんはアングルド・デッキってどう思いますか？

自分はある形は好きになれませんが、効率的で良いのは確かです。

ご意見、ご感想、お待ちしております。

会議再開（前書き）

土日は高体連で忙しいので今日投稿します。

一応レギュラーなので、っていうか体重順なので自分が大将orz

先週、筆が進むとか言いながら本編があまり進んでない???

例の短編に熱が入っちゃいました（^ー^；）

来週は休んで短編作成と誤字修正にしたいと思います。

会議再開

「さて本題の一つ目ですが、2月25日に起こると思われてるクーデターについてです」

自分が司会になり話し合いが始まる。

東条は手を挙げつつ言う。

「我が陸軍としては事が起こる前に内密に対処したい、失敗するとわかっているクーデターで陛下の信用を失いたくないし、私が首相など向いていない」

これは本心だ、東条の天皇陛下への忠誠心は本物だろうし、もしクーデターを企てていたとしても、陛下が首を振ればその通りにするだろう。

「それが妥当だろう」

「反対する理由は無いな」

「異存はない」

どうやら反対は無さそうだ。

「反対はないのでクーデターについては陸軍内で処理するということ」
とでよろしいでしょうか？」

全員が頷く。

「では次です。近い将来、起こりうるであろう対米戦についてですが、私から説明を…」

サツと当たりを見回す。

全員興味津々のようだ。

「まず、対米戦は海軍が主役になります。

陸軍は比島制圧位しかやることはありません」

ここで海軍の者が目を輝かせ、逆に陸軍の者は渋い顔になる。

「しかも海戦の主役は戦艦から空母に移り、空母を中核とした機動部隊が活躍します。

しかし、有効性がないと言っわけではありません」

山本が目を細める、山本五十六は現在航空本部長を務めており、航空機への理解が深い。

「米国は戦艦を大戦後、上陸支援に使用しておりますし、また我が海軍も高速戦艦に空母部隊の直衛に使用しており、それなりの成果を出しております」

永野は納得した顔をしながら

「要するに我が海軍は空母と高速戦艦中心の建艦計画を立てればいいわけだな？」

「大体そうですね、それと戦時急造型の駆逐艦、機動部隊の直衛艦、船団護衛専門の盛り込むべきでしょう」

「何故だね？」

「1つ目は、いざ戦争になれば他の艦種はともかく駆逐艦の損耗が激しすぎるからです。我が国が開戦するまでに建造した駆逐艦の内、敗戦時残存していた駆逐艦は10隻程度でした。」

2つ目は、空母は脆弱ですので専用の護衛艦が必要なのです。」

3つ目は、我が国は資源が少ない為、物資の殆どは海外から手に入れています。潜水艦や航空機によって殆ど届かなくなる、という事態になるのを防ぐためです」

「わかった、計画の参考にしよう」

「ありがとうございます。続いて陸軍ですが」

ゴクリ…

陸軍側が爛々と目を輝かせる。

「歩兵戦では点ではなく、面で制圧するのが基本となります。半自動式小銃の配備が必要です。」

また、戦車戦が多数勃発します。重戦車や対戦車兵器の開発及び生産、機甲師団の設立が急務です。」

それと、航空機の重要性は更に上がります。」

更に言つと補給は戦闘より重要です。いくら屈強な兵士でも腹が減つて、弾が無ければ戦えませんし、戦車も燃料が無ければ動きません」

「ふむ 各部にはその様に話を通すとしよう」

「よろしくお願いします。」

最後に、航空機に関してですが、これは陸海軍で統一した方が生産効率が良いでしょう。意地を張り、それぞれ好き勝手に作れば一つ一つの機種が生産数も減りますし、部品の相互性が無ければ生産、整備に支障をきたします」

「うーむ……」

「そうか……」

陸海軍は唸っている。それはそうだろう。ここで航空機開発の主導権を握れば相手に対して優位に立てるが、負ければ次が何時来るのかわからない。

「そうですよ。実際に三菱は、両方から依頼が来てしまつて手が足りないと言っていましたし」

そこで中島飛行機の社長、中島 喜代一が追い討ちをかける

「わかった。善処しよう……」

「検討する……」

「わかりました。なるべく早く結論を出してもらえると助かります」

これで日本は変わるだろう、軍部の政治的影響力を排除し、重工業化を推進して国力を増強する。

更に周辺国との協調姿勢をとればいかに米国でも手出しできない、いや、例え戦争になつたとしてもそう簡単に日本は負けやしない。これからは忙しくなるだろう。

そう思いながら次なる議題に移るべく、資料をめくつた。

会議再開（後書き）

「どうも、作者です」

「主人公の真田雄二だ。どうした作者」

「いやね？ただアンケートでも取るうかと」

「アンケート？なんの？」

「空母と戦艦、巡洋艦の名前、締切は7月2日です」

「は？」

「性能とかは決まったんだけど名称がね、特に巡洋艦が」

「戦艦と空母は？」

「一応決まってるけど、いい名前があれば採用するよ。
ただ巡洋艦は本気でヤバイ」

「作者、しつかりしろよ」

「あはは？？？ごめん」

「ま、と言つことので、ご意見、ご感想は何時でも受け付けています」

「ではまた次回」

「「「お楽しみに」」」

まさかのクーデター（前書き）

二週間って長いような短いような？って感じですね。

後、艦名に関してですが、おかげさまでほぼ決まりました。近いうちにもまとめて投稿します。

まさかのクーデター

正月気分も抜けきらない1月8日、陸軍の爆撃機が二機、霞ヶ関の近くの飛行場を発進した。

二機の小型爆撃機は赤坂の方へ機首を向ける。

『首相官邸を視認、暖降下で仕掛ける』

『了解』

2000メートルから暖降下を開始し、1500メートルまで降下したとき、四発の爆弾が放たれた。

爆弾は一発が庭に、三発が狙い違わず首相官邸に直撃した。官邸は易々と天井を突き抜けられ、瞬く間に崩れ去った。

『よし、我々はこれより機体を投棄し帰還する』

その時、夕暮れ色に染まっていた空にシミがポツポツと浮かび上がる。

『！？後方より戦闘機多数！』

『なに！？』

戦闘機は爆撃機の横に付くと指定の飛行場に着陸せよとサインを送ってきた。

『くっ……降下せよ、官邸に体当たりを仕掛ける』

『しかし…!』

『うるさい! 機体に火をつける!』

しかし、その命令が実行されることはなかった、戦闘機は進路変更に応じないと見て爆撃機の後ろについて一連射、偶然にもエンジンと操作系統を貫いた。

機体は大通りに胴体着陸した。

搭乗員は逃走を図るも海軍第一特別陸戦隊が赤坂一帯に展開しており、すぐさま御用となった。

「陸軍機が首相官邸を爆撃!?!」

「うむ、幸い私と近藤首相は料亭にいたから難を逃れたが、秘書官数人が負傷した」

「東條閣下はなんと?」

「陸軍の急進派残党の仕業と見ているらしい、海軍に帝都一帯にある陸軍基地の上空監視を要請してきた」

「横須賀航空隊と帝都防空隊をだしましょう。念のため連合艦隊に東京湾集結命令を」

「わかった」

「偵察機より報告です! 第一連隊駐屯地より第一連隊が移動を開始、霞ヶ関一帯を封鎖すると思われませう!」

「特別陸戦隊を回せ! 威圧ぐらいにはなる!」

「はっ！」

「私は近藤首相と陛下に状況を報告する、君も来るかね？」

「お邪魔でなければ」

「第一連隊と合わせて陸軍航空隊の一部が第一連隊の直衛にあたっている模様で、緊急発進した陸軍戦闘機隊、海軍陸戦隊と睨み合いが続いております」

「此度の反乱は我が国が未だに世界恐慌の影響から抜け出せずにいる事に業を煮やして起きたものと思われます。

しかし彼等とて臣民の一人、どうか寛大なる御慈悲を……」

「幸い今の所死者は出ていないようだが朕と他の臣民に矢をつがえたのは事実、いざとなれば朕自ら近衛師団を率い鎮圧にあたらんぞ」

ザワッ

「海軍は現在、東京湾に連合艦隊を集結中でありまして、空母艦載機より降伏を呼びかけるビラを撒く予定です。

わざわざ陛下にご足労頂くわけにはいけません」

「わ、我が陸軍も直ちに近衛師団を展開させます」

「そうか……、今こそ国難の時である、各員手を取り合い協力して事に当たれ」

「はっ！」

赤坂を制圧しようとした反乱軍は、明らかに一個師団を超える規模の部隊と対峙していた。

「第二大隊から通信、霞ヶ関にて戦車を含む大部隊を見ゆ、霞ヶ関制圧は困難なり」

「くそ！」

指揮官と思われる士官は机を叩くと腹立たしげに怒鳴る。

「このままではジリ貧ではないか！直衛の戦闘機隊は燃料が切れればそれまでだ！それに彼奴等は装甲車両まで用意してきた！」

その怒声が合図のように、次々と報告が上がってくる。

「観測班より通信！東京港沖合に軍艦多数、砲門全て照準済みの如し！」

「直衛機より連絡！我、燃料欠乏す！」

「脱走兵多数！このままでは統制が保てなくなります！」

「も、もうだめだ……」

士官は悟った、例えこの場所に諸葛公明が現れたとしても万に一つの勝ち目も無いと。

結局、反乱軍は脱走が多発し、近衛師団が包囲するまでもなく主犯格は投降、事件は終局を迎えた。

まさかのクーデター（後書き）

最近暑いですね（^ー^；）

自分は早くも夏バテ気味で、練習にも身が入りませんドーシヨ（、
、）

短編はだいぶ仕上がりました。これも近いうちに投稿出来るかな？

事後処理（前書き）

パソコンが大破しました（ーー；）

前々から調子悪かったですが、丁度ケータイにバックアップする寸前だったので貯めてた原稿がほぼ無くなりました。

…どうしよう（ーー；）

事後処理

この度、帝都を襲ったクーデター事件は例の如く『1・08事件』として全国に発表されることになった。

死傷者125名、首相官邸大破という被害は世論を沸騰させるには十分すぎた。

新聞では連日、日頃の鬱憤を晴らすように陸軍の横暴が伝えられ、陸軍軍人はまともにも外を歩けなくなった。

これに対して上層部は、陸軍全体の半年間減俸、主犯格の処刑、もしくは無期懲役と妥当な処分を下した。

しかしこれぐらいで世論は鎮静化しない、むしろ激化していった。

各地の陸軍基地で一般人の襲撃が多発し、厳戒態勢を敷かざる負えなかった。

それに反比例するように海軍の評判は上がり上がった。クーデター事件に対する迅速な対応が好評だったようだ。

海軍軍人が食堂に入れば全てのメニューが只になり、バスに乗れば席を譲られる。

そのような待遇が続けば慢心する者も現れるもので、海軍内でのモラルが問題になり、海軍でも厳戒令が出された。

一方、国会は荒れに荒れていた。

「この度のクーデターは陸軍の傲慢が原因である！陸軍は責任を取るべし！」

「陸軍は規模を縮小しろ！」

と与野党問わず攻撃していた。

陸軍解散しろ、などと言われただけまだマシだろう。

陸軍は予算など取れるはずもなく、師団数を増やす所か二個師団ほど削減しなければ維持さえ困難だった。

削減して浮いた予算は、主に経済対策にまわされ、海軍も多少の恩恵を授かる事が出来た。

予算案が成立して暫くした夜、赤坂の料亭では米内、東條、真田が会食をしていた。

「今回の事件のおかげで翔鶴型が追加発注できたよ」

米内はほくほく顔で徳利に手を伸ばす。

「此方は逆にてんてこ舞いだ」

東條はしかめっ面で杯を煽る。

二人は同じ酒を飲んでいる筈だが、全く違う酒を飲んでいる様だ。

「二個師団の削減は元々するつもりだったし、ついでに厄介払い出来たからともかく、予算がギリギリ過ぎて部隊の機械化どころか車両開発すら出来ない。」

いや、このままだと更に師団数を削減しなきゃあならんかもしれん」

米内はそのことを聞くと少し困った顔をした。

「それは困る。」

今こつちで建造している輸送艦は車両用が多い、通常の兵員用にも出来るが改装せねばならんし、師団数が減ればその分ソ連の圧力が強くなる」

「海軍で戦車の開発は出来ないのですか？」

「この際共同開発でもなんでも構わん、なんとかしてくれ」

真田がこう提案すると東條も土下座する勢いで頼み込む。

「むう……、わかった、共同開発で良いか？」

この言葉を聞いた瞬間の東條の顔は、まるで雨の中拾われた子犬のようだった。

忘れてた(前書き)

かなり短めです。パソコンの中身のサルベージに失敗して急いで書いたので誤字があるかもしれません。

忘れてた

やあ読者諸君、本文ではこうして挨拶するのは初めてだな、真田雄二だ。

今までと口調が違う？そりや今までは米内さんとか山本さんとか、お偉いさんと話していたからな、敬語は日本社会の必須スキルだ。キチンと出来ない痛い目見るぞ。

ちなみに、俺はいま三菱の航空研究部で若手技術者を集めての講義の真っ最中だ。

議題は『欧州の航空機開発情勢と傾向』、主にドイツ、イギリスの航空機についての開発状況と運用形態、これからの見通しについて。

「……よつて、1500馬力級戦闘機用エンジンの速やかな開発、量産は至上命題だ」

俺が当分の目標を提示して話を締めくくると、その場にいた者から困惑した声上がる。

「1500馬力なんて……1000馬力級ですら開発が難航しているのに……」

「開発に成功してもいま日本にある工作機械の精度じゃ量産品の品質が保証出来ない……！」

まあそりやそうだな、俺だって現状で三年以内に作れなんて言われた日にゃ逃げ出すもん。しかし、紳士は抜け目がなかった（キリッ

「心配するな、ここに欧州で開発中の新型エンジンの設計図があるし、工作機械もイギリス、ドイツから細々ではあるが買い集めてい

る」

俺がさりげなくマリーンエンジンとかの数十枚の設計図と資料をだす。

「い、このようなものがなぜ・・・!?」

ぶっちゃけパソコンからプリントアウトしただけだ、とは言えんな。

「あらゆるコネを総動員して貰った物だ、それを参考にすれば大分楽だろう」

だからサラッとごまかす。これも日本社会の必須スキルだ。

「工作機械もある程度数が揃えば国産化が可能になる、勿論品質は多少落ちるがそれは後々改善していけばいい」

こればかりは地道にするしかない、俺は熟練工でもなければ世紀の天才でもないからな。

「では早速作業に取りかかりましょう、真田さんにもお手伝い願いたいのですが・・・」

ふむ、どうするか、この後設計部にも顔を出したいのだが・・・

「よく考えたら俺の本職こっちだった」

ここ数ヶ月違う事ばかりやってて忘れてた。

「わかった、この後行くところがあるから基本方針だけでも決めて

しまおう」

「わかりました」

一時間かけて基本方針を決めた後、そのまま設計部で似たようなやりとりをして、帰る頃には夜の12時を過ぎていた。

忘れてた(後書き)

次回はヒロインでも登場させようかと、名前が思いつかない(ー)；

出会い（前書き）

夏休みに入ったどー！

ま、講習とかいろいろあつてあまり休みないんですけどね、とりあえず今年は呉まで旅行したいです。

それと、これからは土曜日更新にして、ついでに活動報告を日記みたいに使おうかと思っています。（どこがついでなんだ？）

追伸、今回の話は勢いで書いた、反省はしていない。

出会い

少女はとある建物の前に立っていた。

「で、でかい……」

父から聞いていた会場とは随分違う事に驚く。

聞いた話によると会場は、豚小屋ですか？と言いたくなるような、思い出すだけで胸焼けがしてくるような場所らしい、しかし目の前に見えるのはどう考えてもどこかの庁舎にしか見えない。しかも歴史を感じさせる。隣に建っているなんだか庶民っぽい家（？）が微妙に気になるが、

「……………は！ただでさえ遅刻してるのに、こんな所で止まってちゃマズい！」

ダッ

少女は駆け出した。……………が直ぐに止まった。

「どこ、行けばいいんだろ？」

それより少し前

真田は会議室で面接のセッティングをしていた。

「あつ、しまった、SDを持ってくるのを忘れた」

「真田君、充電が足りなそうだ、ついでにバッテリーを持ってきてくれ」

「あと冷却用のフィンも頼む」

山本がそう言いながら見ているのは倉庫から引っ張り出したトランジスタと家電で作ったワープロの紛い物だ。親父が昔集めていた物

で、各研究所にサンプルで送った物を除いても1000個以上あったから試行錯誤して作り上げた代物、画面はパソコンを液晶に取り替えた際にしまい込んだブラウン管だ。

他に二台が稼働し、二台が予備機になっていて、一応普通のパソコン並みに文字は打てるようになってる。

「わかりました。じゃあ行ってきますね」

「頼むよ」

「お、あれは……」

家から必要な物を取った帰り、傍目から見れば明らかに小学生な装いをした少女が居た。

走り出したりキョロキョロし出したり、明らかに挙動不審です、はい。

「……………スルーだな」

ああいうのは関わらないが吉、という感じで中に入ろうとする。

「あ！すいませーん！」

(ロックオンされた(; ;))

真田は女性にいい思い出がない。

(と、勝手に思っている)

小さい頃通っていた剣術道場の娘に高校で再会して「特訓だ！」と叫ばれ剣道部と柔道部を兼部する事になったり(ツンデレ)、少女が不良に絡まれてるのを助けたらむしろ少女の方がバトルジャンキー(照れ隠しで殴ってるだけ)だったりした。

(要するにフラグメーカー、旗男)

女性関係の厄介ことは避けたいのが本音だ。
しかしフラグメーカーの宿命からは逃げ切れない。

「第一期海軍航空科試験の会場って何処ですか？」

少女が駆け寄ってきてさつと荷物を持ってしまった、これでは逃げられない。

「あ、ああ、航空科の試験会場か、今から行くところだ、ついてきたらいい」

「ありがとうございます」

「見ての通り雑用中だな、持ってくれて助かる」

「いえいえ」

「ところで試験会場なんかについて何をするつもりだ？お父さんの応援かなにかか？」

「ち、違いますよ！私こつみえても十六才です！」

「……そうか」

「あ！信じてませんね!？」

「いやそついう訳ではないが……」

「証拠を見せてあげます！」

ドスン、ガサゴソガサゴソ
荷物を置いて背負っていたリュックを漁り始める。

「あれ？どこにいったのかな？えーと…あ、あったあった」

ガサッ

取り出した紙を真田の前に突きだしてみせる。

「ほら、受験票です」

「浅間美琴…確かに十六才だな」

「わかってもらえましたか」

「ああ」

「しかし凄いですよね、女性でも軍に入れるようになるなんて」

これについては、真田がこちらに来てからすすめた計画のひとつの、女性の参政権獲得が働いていた。

権利を得るなら義務も必要だ、ということ、女性の兵役義務を設けたのだ。

勿論、女性は基本的に条件が大分ゆるい上、後方勤務にまわされるが、本人の希望で航空隊等、実戦部隊にも配置してもらうことが出来る。（ほとんどいないが）

「数ヶ月前なら思いつきもしなかっただろ、なんで軍に来た？」

「はい、私の父は昔、陸軍の戦闘機搭乗員だったんですけど、一度だけ飛行機に乗せてもらったことがあるんです。」

最高でした、空を飛ぶってこんなに凄いんだって思いましたよ。その時の気持ち忘れられなくて気づいたら志願してました」

美琴はスツと目を細めて遠くを見る。

真田にはそれが何か悲しげに見えた。

「そっか……」

「？」

「……」

「……」

「あの……」

「軍人なんて職業は人を殺してなんぼだ、空を飛びたいなら他にもあるだろう」

「え？」

「これは自分にも関係することだ、空を飛びたいだけで軍に入って、何の覚悟も無いまま人を殺してみろ、一生後悔するぞ」

「…そう、ですね……」

「と、えらい口を叩いてしまったな」

「いえ、そんなこと」「大佐！そろそろ打ち合わせです！」「え？」

「わかった！つたく、階級で呼ばれるのは柄じゃ無いってのに…」

真田は美琴の荷物を持つ。

「荷物は彼に持ってもらおうよ、試験会場はその廊下を突き当たったところにある」

「あ、ありがとうございます」

（お父さんみたいな人だったな…）

美琴は面接室の前の待合室で考えていた。

父親は元々農家の三男坊で、口減らして海軍に入った。当時、新しく設立された航空科に配属され、才能があったのかメキメキと頭角を表した。

とても優しい人で、自分が軍に入りたいと言うと反対したが、本気だとわかると一転して、心構えや知識を出来る限り教えてくれた。しかし、四日前に訓練中の事故で殉職してしまった。

自分が今日の試験のために上京して、訓練飛行を見せてもらっていた目の前でだ。

（だけど違う）

あの人の心の奥底に、父親とは違う何かが見えた気がした。考えると心が痛むような、辛くなるような、

（ああ、私と少し似てるんだ）

あれは自分と同じ、大切な人を無くしたことがある物だ。
そう結論づけると突然声を掛けられた。

「次、浅間美琴」

「あ、ヤバ」

あの人の事を考えていて心の準備も出来なかった、代わりに緊張もしていないが。

コンコン

「浅間、入ります」

扉の前に立ちノックをして中に入る。

中にはいると、箱（粗製パソコン）で顔が見えないが試験官が居るのがわかった。

「ん、座ってくれ」

「はい」

「では最初に、さっきのことについて答えを聞かせてくれるか？」

「…………え？」

（この声は…………）

そう思った瞬間、箱からにやりと笑った真田がひよこつと顔を覗かせる。

「おんこく」

出会い（後書き）

艦名が決まったので次回から数回はそれらの紹介をしたいと思います。
す。

ついでに短編（5、6部位の）も同時投稿します。

第1回登場艦艇紹介（前書き）

短編、投稿しました。

暇なときにでもみてください。

追記、機銃が40mmになっていますがミスです。
実際は30mmです。

第1回登場艦艇紹介

「どうも、作者です」

「主人公の真田雄二だ」

「浅間美琴です」

「この企画は作者を司会に登場予定の艦艇群を数回に渡って紹介しようという企画です」

「ネタが思いつかないからしばらくはこれで乗り切ろうって魂胆まる見えだけどな」

「ソ、ソナコトアリマセンヨ……?」

「凶星か」

「あまりいぢめちゃいけないですよ?」

「事実だ」

「そうですね」

「んで、今回は何なんだ?」

「今回はみんな大好き海の女王こと『戦艦』だ!」

「戦艦ですか」

「改装後の旧式戦艦群も紹介するよ」

「ではトップバッター、作者も大好きな金剛型！」

金剛型高速戦艦

基準排水量 33000 t

速力 33 kt

航続力

18 kt 20000 km

武装

36 cm 連装砲 4 基

8 門

14 cm 単装速射砲 10 基

10 門

12.7 cm 連装両用砲 8 基

16 門

40 mm 連装機銃 6 基

12 挺

40 mm 3 連装機銃 26 基

78 挺

搭載機

3 機

「いやあ、金剛型独特のどっしりした前楼は素晴らしいの一言だなあ」

「作者さん、トリップしないでください」

「榛名あ」

「ダメだ、完全にイッちゃってる」

「……」

「どうしたの？雄二さん」

「いや、この14cm単装速射砲ってなになになって」

「ああ、それは元々あった単装砲室を利用して作った対雷撃機兼対艦速射砲だね」

「んだそりゃ？」

「半自動装填式の対空炸裂弾使用可能だけどケースメイトだから仰角が取れない、ただ低空から接近する雷撃機には効果が期待できるよ、海面に撃ち込むだけで射線を潰せるからね」

「なるほど」

「全体的に見ると対空能力がかなり強化されてますね」

「対艦能力は維持しつつな」

「では次、扶桑型と伊勢型！」

伊勢型戦艦

扶桑型戦艦

基準排水量 36000 t

速力 27 kt

航続力

16 kt 23000 km

武装

36 cm 連装砲 6 基

12 門

14 cm 単装速射砲 10 基

10 門

12.7 cm 連装両用砲 6 基

12 門

40 mm 連装機銃 10 基

20 挺

40 mm 3 連装機銃 28 基

84 挺

搭載機

3 機

「おい、高角砲の門数が金剛型より少ないんだが」

「主砲塔の占有率が高いからね、搭載できてこれぐらいかなって」

「主砲塔多いですからね」

「では次行ってみよー」

「軍縮条約時代のビック7、長門型!」

長門型戦艦

基準排水量 40100 t

速力 27 kt

航続力

16 kt 2000 km

武装

41 cm 連装砲 4 基

8 門

14 cm 単装速射砲 16 基

16 門

12.7 cm 連装両用砲 10 基

20 門

40 mm 連装機銃 16 基

32 挺

40 mm 3 連装機銃 24 基

72 挺

搭載機

3 機

「そつえば扶桑型、伊勢型、長門型も一律 27 kt ですね、なにか理由が？」

「この 6 隻は元々低速だからね、機関換装して艦尾延長工事してもこれぐらいだよ。」

扶桑型、伊勢型は装甲も強化するから特にね」

「扶桑型は脆いからな」

「では次、みなさん大好き大和型！……は最後にして、先にそれより小型の甲斐型です」

「甲斐型？」

「機動部隊直衛用の高速戦艦が足りないことに気づいてね、対米戦勃発前後に出す予定だよ」

「何隻建造予定ですか？」

「甲斐、伊予、淡路、駿河の4隻だよ」

「だいぶ造りますね、国庫は大丈夫ですか？」

「経済的には潤ってるからね、史実で大和型3番艦、4番艦を建造していた事を考えれば難しくはないと思うよ。とにかく、百聞は一見に如かず」

「たしかに、ではどうぞ」

甲斐型戦艦

基準排水量

50000 t

速力

33 kt

武装

41cm三連装砲4基

12門

12.7cm連装両用砲14基

28門

40mm三連装機銃40基

120門

搭載機

4機

「41cm三連装4基……」

「門数だけ見たら4隻で長門型6隻分だな」

「高角砲も14基で対空防御は堅固、そして33ktの高速力が目玉だね、大抵の空母について行ける」

「これなら艦隊決戦に引つ張つてきても十分活躍できるし、上陸支援もこなせる」

「要するに万能艦って事ですね」

「では最後、帝国海軍の最終兵器、大和型！」

大和型戦艦

基準排水量

70000t

速力

30kt

航続力

18kt - 25000km

武装

46cm連装砲2基

4門

46cm三連装砲2基

6門

12.7cm連装両用砲18基

36門

40mm三連装機銃60基

180挺

搭載機

8機

「史実の大和型よりデカいですね」

「まあ数千程度ですから」

「あと主砲の配置が気になるな」

「前から三連装、連装、艦橋構造物等、連装、三連装になっているよ、最初は甲斐型みたいに三連装4基にしたかったけどかなり大型になるからね、連装を上にして重心を少しでも下げるといって涙ぐましい努力をした結果だよ」

「友鶴の二の舞にはなりたくないですからね」

「さて、そろそろ次回予告を……ん？主砲塔が動いてる」

「いいんですか？こんな事して」

「他の小説では以外と多いらしい」

「そうですか…あ、主砲照準完了しました」

「よし、全門一斉射撃よーい……っ撃え！」

ズガーーン！

「ぎゃあああああ！」

「おお、戦艦の主砲は野砲干門に匹敵すると聞いていたがそれ以上だな、作者が跡形もない」

「次回は現代戦の要、空母です。
お楽しみに」

第二回登場艦艇紹介（前書き）

本日は原爆の日です。

思想、主義に関係なく、原爆で亡くなった全ての方々へ黙祷の意を捧げます。

第二回登場艦艇紹介

「先週爆死しかけた作者です」

「真田雄二だ」

「浅間美琴です。っていうか作者さんよく生きてましたね」

「作者スキル使ったら生き返ったよ」

「生き返ったってことはいつペン死んだんだな？」

「……………さあ今回紹介するのは空母です」

「そらした……………」

「黒歴史なんですよ」

「では最初は日本空母最古参の鳳翔！……………ですが飛ばしまーす」

「拡張性皆無ですもんね」

「龍譲も同様の理由でスルーだな」

「それではいきます、史実では南雲機動部隊の旗艦を勤めた巡洋戦艦改装空母、赤城！」

「ちなみに、登場する15000t以上の空母は全てアングルドデッキを装備しています」

「効率重視だな」

赤城

基準排水量37000t

速力34kt

航続力

18kt 18000km

武装

14cm単装速射砲4基

4門

長10cm連装高角砲12基

24門

30mm3連装機銃32基

102挺

搭載機

82機

「砲郭を削ってその分を格納庫に回したんですね」

「あと艦尾延長工事して速力を増強したりしたよ」

「この高角砲は史実の秋月型に搭載されていたのと同じと
思っているのか？」

「いや、多少の性能低下に目をつぶって生産性を引き上げた量産夕

イブだよ」

「あの砲はまるで工芸品だったらしいですね」

「では次、何かとツいてない加賀！」

加賀

基準排水量40000t

速力30kt

航続力

18kt 18000km

武装

14cm単装速射砲6基

6門

長10cm連装高角砲9基

18門

30mm3連装機銃32基

96挺

搭載機

84機

アングルドデッキ装備

「真珠湾では魚雷の積み込みが最後、パラオで艦底部を損傷してインド洋作戦は不参加、ミッドウエーでは艦橋が一番に被弾して最終的にはガソリン庫に引火して爆沈、運がないといつかなんといつか

……」

「こつちでは大規模な艦尾延長工事と機関換装でだいぶ高速になっているよ」

「史実での不運を継承してないことを祈るばかりだな」

「では次は新造艦、蒼龍型！」

蒼龍型空母

基準排水量25000t

速度33kt

航続力

18kt 15000km

武装

長10cm連装高角砲12基

24門

30mm3連装機銃28基

84挺

30mm単装機銃12基

12挺

搭載機

76機

同型艦

8隻

「8隻も建造するんですか」

「まあ暫定ね、物語の展開によって建造数、性能が多少前後する可能性があるよ」

「戦時急造を考慮した中型空母ってところか」

「要するに、性能を上げた雲龍型ですね」

「では次、初めの方からちよくちよく出ていた翔鶴型！」

翔鶴型空母

基準排水量 43000 t

速力 34 kt

航続力

18 kt 18000 km

武装

長10cm連装高角砲 14基

28門

30mm三連装機銃 34基

102挺

搭載機

120機

同型艦

4隻

「おおデカイデカイ」

「世界最大級の空母ですね」

「その世界最大級の空母にふさわしく搭載機数と武装もトップを突っ走る感じで」

「120機つてミッドウェー級より多いですね、露天繫止でもしてるんですか？」

「いや、たしかにミッドウェー級は50000t級だけど装甲空母だからあの機数だけで、そうじゃなかったら150機ぐらいにはなると思うよ」

「なるほど、それならこれぐらいが妥当ですね」

「だな」

「さて、次で制式空母は最後です。

史実ではマリアナ沖海戦で第一機動艦隊総旗艦になった大鳳型！」

大鳳型装甲空母

基準排水量51300t

速力32kt

航続力

18kt 18000km

武装

長10cm連装高角砲16基

32門

30mm3連装機銃34基

102挺

30mm単装機銃10基
10挺

搭載機
90機

「さっき紹介した加賀、なぜか攻撃が集中する翔鶴、初戦のマリアナ沖海戦で潜水艦の魚雷一発で沈んだ大鳳、竣工3日後に沈んだ信濃、ツいてない艦は他にも幾つかいますが有名どころはこんな所でしょうか」

「かわいすぎて涙がでるね」

「こつちでは翔鶴型よりデカいぞ、史実でもそうだったが」

「史実の信濃よりは小さいけどね」

「しかし、純粹に空母として設計された物としてはミッドウェー級と並んで最大ですね」

「装甲は100ミリ、500kg位なら弾き返せるよ」

「なるほど」

「では最後は量産型護衛空母、大鷹型！」

大鷹型護衛空母

基準排水量12000t

速力25kt

航続力

16kt 15000km

武装

12.7cm連装高角砲4基

8門

25mm三連装機銃18基

54挺

搭載機

25機

同型艦

多数

「多数つて、いったい何隻建造する気だ？」

「うーん……十隻単位？」

「日本でこれだけの大型艦を十隻単位でマスプロ建造するんですか？」

「日本の長大なシーレーンを支えようと思ったたらまだ数が足りないよ」

「で、作者よ」

「なんだい？」

「空母を紹介したってことは艦載機も紹介するよな？」

「もちろん、空母は艦載機がないとただの箱だからね」

「よくわかってるじゃないか」

「当分、機動部隊の主力機になる三機種を一挙に紹介するよ。ただし、この設定はあくまで暫定的な物だから注意してね」

九八式艦上戦闘機11型

『蒼風』

全金属製単葉収納脚式

空冷式 秋嵐発動機

1500馬力

最大速度591km/h

武装

13mm機銃

8挺

爆装

100キ口爆弾1個

もしくは

60キ口爆弾2個

九七式艦上爆撃機22型

『惑星』

全金属製単葉収納脚式

水冷式 天嵐発動機

1800馬力

最大速度500km時

航続距離

2500km

武装

13mm機銃4挺

後部

13mm旋回機銃1挺

爆装

250キ口爆弾2個

もしくは

500キ口爆弾1個

九七式艦上攻撃機12型
「信山」

全金属製単葉収納脚式

空冷式 紫嵐発動機

2000馬力

最大速度

470km/h

航続距離

3000km

武装

後部上方

13mm旋回機銃1挺

後部下方

13mm旋回機銃1挺

爆装

1000kg爆弾1発

もしくは
900kg航空魚雷1発

「蒼風はF6Fと同等の武装、速力と零戦譲りの高い機動性を併せ持った軽戦闘機って感じですね」

「仮に対米戦が史実通りに始まって中期までは圧倒な強さを誇るだろうな」

「この機体は1943年頃まで使用予定だよ、それ以降は新型を開発する予定」

「惑星は戦闘爆撃機ですね」

「13mm4挺持つてるからね」

「機体が頑丈だから急降下の一撃離脱に徹すれば十分つかえる」

「だから搭載比率は艦爆が際立って高いよ」

「信山は基本的に天山を元にしてますね」

「天山そのものは防弾設備以外の欠点を探す方が難しいぐらい優秀な機体だしね」

「確かに」

「ちなみに、発動機がこんなに強力なのは機体がだいぶ大型になったからだよ」

「さて、次回は…？空に黒い斑点が見える」

「作者さん、悪く思わないでくださいね？」

「ちよ、まつ、艦載機500機位から銃爆撃されたら死ぬって！マジで…ぎいいやあーーーー！」

「次回は巡洋艦、お楽しみに」

第三回登場艦艇紹介（前書き）

携帯からスマホに変えました、めっちゃ書きづらい

第三回登場艦艇紹介

「さて、第三回は巡洋艦編ですが、殆どが旧式艦の軽巡は省きます」

「まあ、開戦時の最新鋭艦の川内型も艦齢15を超えてたからな、近代化工事でも限界がある」

「となると、使い道は護衛総隊に編入して護衛戦隊の旗艦任務か、友邦に払い下げるの二択ですよ」

「護衛戦隊旗艦用巡洋艦はもうできてるからな、中国とかタイとか、満州国に払い下げるのもいいかな？」

「意外にソ連辺りが買い取るとか言い出したりして」

「ないない、それにできれば艦型丸々買い取ってくれる所がいいな、姉妹が離れ離れになるのはイヤだし」

「ちなみに売りに出すとしたら全部で何隻ですか？」

「うーん……、天龍型二隻、球磨型五隻、あと夕張かな？」

「計八隻、となると、新造艦は十隻以上はいるな」

「そうだね、艦隊型軽巡八隻、護衛総隊用軽巡四隻、小艦隊旗艦用軽巡数隻で大体十五隻位かな？」

「だな」

「それではそろそろ始めましょうか」

「では最初は重巡から」

「妙高型、高雄型、最上型については史実の対空強化型の機銃、高角砲をこちらの方で使用中の火器に置き換えたただけなので省略します」

「まずは古鷹型、青葉型です」

古鷹型重巡

青葉型重巡

基準排水量9000t

速力33kt

航続力

14kt・12000km

武装

20・3cm連装砲2基

4門

長10cm連装高角砲8基

16門

30mm連装機銃20基

40挺

30mm機銃8基

8挺

61cm4連装魚雷発射管

2基

搭載機

3機

「うーん、後部の主砲を撤去して高角砲4基と機銃を増設してみたんだけど、どうかな？」

「性能的には使えると思いますよ？船団護衛とかで活躍しそうです」

「ただ、高角砲を4基もどつやって積んだんだ？」

「それはこんな感じに」

艦首側

設置位置の高さ

高
中
低

「ピラミッド式に配置すれば比較的小型の砲に関しては問題なく搭載可能なはず」

「実際可能なのか？」

「さあ？」

「おいこら」

「実際にこの方式で搭載された艦は自分が知る限り無いからね、な

んともいいようがない」

「じゃあ使つな」

「えー」

「…まあいい、次だ」

「次は新造艦だよ」

阿蘇型重巡

基準排水量12500t

最大速力36kt

航続力

18kt - 17000km

武装

20.3cm連装砲6基

12門

長10cm連装高角砲8基

16門

30mm3連装機銃16基

48挺

30mm連装機銃8基

16挺

61cm4連装魚雷発射管2基

8門

水偵なし

同型八隻

「搭載機無しって、巡洋艦の本来の任務は偵察ですよね？」

「だって、正直水偵って偵察と連絡以外であんまり使い道ないし、基本的に制式空母部隊の直衛か、戦艦部隊の前衛だからね、他の艦に任せるからいらないよ」

「だからその分武装にまわしたのか」

「基本的には最上型をシャープにして、カタパルトの代わりに主砲のつけて対空砲を増設した感じかな？」

「じゃあ次だ」

開闢型重巡

基準排水量 11000t

速力 36kt

航続力

18kt - 17500km

武装

20・3cm連装砲 4基

8門

長10cm連装高角砲 6基

12門

30mm連装機銃 14基

28挺

30mm3連装機銃 10基

30挺

61cm4連装魚雷発射管 2基

8門
搭載
水偵8機

「今度はだいぶバランスがとれてるな、基本的には阿蘇型の後部主砲と高角砲の一部を撤去して、航空装備を取り付けた感じか」

「小艦隊の旗艦や、軽空母で編成された小型機動部隊のエスコートが主な任務になるよ」

「では次は軽巡ですね」

「そうだね、軽巡は冒頭で説明したように旧式は飛ばします」

「じゃあ新造艦です」

五ヶ瀬型軽巡

基準排水量7000t

最大速度36.5kt

航続力

18kt・14000km

武装

14cm連装砲4基

8門

長10cm連装高角砲6基

12門

30mm3連装機銃10基

30挺

30mm連装機銃6基

12挺

61cm4連装魚雷発射管2基
8門

搭載

水偵2機

同型八隻

「売却、譲渡した旧式艦の代艦です」

「阿賀野型の拡大発展型だな」

「じゃあ次」

石狩型衛巡

基準排水量8800t

速力24kt

航続力

16kt・20000km

武装

長10cm連装高角砲12基

24門

30mm3連装機銃16基

48挺

30mm連装機銃6基

12挺

爆雷投射機

2基

搭載

水偵5機

同型五隻

「主砲がないです」

「艦橋を大型化して旗艦設備を整えて、高角砲は古鷹型と同じ方式で無理やり詰め込んでみたよ、艦首4基と舷側4基で、艦首のソナーと艦尾の爆雷投射機2基で対潜戦闘も可能、基本的には護衛総隊で船団護衛任務、かな」

「護衛巡洋艦ですね、こういった艦が一隻あるだけで心強いです」

「巡洋艦はこれで終わりか」

「うん、次回は小型艦艇です、そろそろ終わるけど続きがあまり書けてない(ー；)」

「さっさと書け(- - #)」

「はい、書きます(; ;)」

「では、また次回」

「『『バイニー』』」

「らきすた!？」

「なんで俺まで……！」

「気にしない」

第四回登場艦艇紹介

「第四回は駆逐艦以下諸艦艇です」

「やっと終わって次回からは本編に戻るんですね」

「……」

「作者？」

「……実は……」

「まさか……」

「はい、まだ書き上がっていません……！」

「とりあえず一発逝っとけ」

「そげぶ!?!」

ドカーン!!…

(駆逐艦からの精密砲撃で吹き飛んだ音)

「さっさと起きろや」

「いきなりは酷くないか!?!言い訳位はさせて!」

「100文字以内で述べてください」

「今後の方針がなかなか決まらず、とりあえずいくつつかプロット作
つてみたはいい物の、肉付けが遅々として進まない」

「アンケートとれ」

「アンケートですね」

「うーん……………アンケートしかないか……」

「と、いうことで後書きでアンケートをとりますので、馬鹿な作者
を叱咤するつもりで御回答下さい」

「では最初は駆逐艦から」

「転移後、直前に起工された朝潮型は登場しません」

陽炎型駆逐艦

基準排水量

2600t

速力

37,5kt

航続力

18kt・11500km

武装

12・7cm連装両用砲3基
6門

30mm連装機銃18基

36門

30mm三連装機銃6基

18門
61cm四連装魚雷発射管
2基
爆雷投射機
2基
爆雷投下軌条
2基

「量産型艦隊駆逐艦、史実の陽炎より一回り大型化して余裕のある船体と強力な新型機関によって高い性能をもっているんだと」

「余裕のある設計で、状況によって更に機銃を増設できる」

秋月型護衛艦
基準排水量
2900t
速力
30kt
航続力
18kt - 16000km
武装
長10cm連装高角砲4基
8門
30mm連装機銃26基
52門
30mm三連装機銃8基
24門
爆雷投射機
2基

爆雷投下軌条

2基

「空母部隊用の護衛艦ですね」

「魚雷発射管を除けて機銃を増設、対潜装備は最新式を装備しているぞ」

「一部は護衛総隊にも供給する予定だよ」

一号型

基準排水量

900t

速力

24kt

航続力

16kt・12000km

武装

12.7cm連装高角砲2基

4門

30mm連装機銃7基

14挺

30mm3連装機銃4基

12挺

爆雷投射機

2基

爆雷投下軌条

2基

「使い捨て臭がポンプします」

「ブロック工法を使用して旧式装備を流用してるから生産性は高いよ」

「当分は護衛総隊の主力艦になりそうですね」

伊200型潜水艦

常備排水量

2500t

潜航時排水量

3680t

最大速力

水上

20kt

水中

16kt

航続力

水上

16kt - 3000km

水中

10kt - 200km

武装

13mm連装機銃2基

4挺

13mm機銃1基

1挺

61cm魚雷発射管

艦首4門

艦尾2門

装備

シュノーケール

対空 対水上電探

逆探

「史実で言う乙型に近い性能を持っているな、電探類が充実しているより強力な艦になっている」

「この艦が潜水艦隊の主力になりますね」

伊400型潜水艦

基準排水量

4000t

潜水時排水量

6200t

最大速力

水上

22kt

水中

18kt

航続力

水上

16kt - 65000km

水中

10kt - 150km

武装

長距離対地誘導弾

4基
30mm3連装機銃5基
15挺
30mm連装機銃2基
4挺
61cm魚雷発射管
艦首6門
装備
シノケール
対空 対水上電探
逆探

「対地誘導弾は浮上後3分以内に発射が可能で、射程は約800km、現在地と目標の座標を入力すれば半径500m以内の誤差で攻撃が可能で、更に対艦誘導弾も開発中だね」

「対艦誘導弾って、ぶっ飛んでるな」

「敵艦隊に襲いかかる誘導弾の雨、見てみたいような見たくないような…」

特型輸送艦

基準排水量5000t

最大速力24kt

航続力

16kt - 16000km

武装

14cm単装砲4基

4門

12.7cm連装高角砲8基

16門

30mm3連装機銃14基

42挺

30mm連装機銃6基

12挺

搭載

車両6両

歩兵2個大隊

野砲4門

戦闘機10機

対潜哨戒機2機

同型艦30隻

「今で言う強襲揚陸艦だね」

「基本的にはおおすみの最上甲板の前下部に14cm単装砲二基があつて艦橋の前にも二基ある感じで」

「護衛総隊でも護衛空母として使われる予定です」

「では、次回からは本編です」

「お楽しみに」

第四回登場艦艇紹介（後書き）

アンケートです。番号にそって御回答ください。

来週はお休みしてアンケートの結果を確認してから書き始めます。

？主人公はそのまま技術者か、それとも？

？新キャラを出すか

？出すなら立ち位置はどうするか（参考までに）

集計は来週の土曜までです。ご協力よろしくお願ひします。

造船所にて（前書き）

アンケートの結果を考慮して新キャラ？を出してみました。

あと、作者に恋愛パートは無理でした、ご了承ください。

造船所にて

久しぶりに本編に戻ってきたな。

時は1936年5月、俺は今、横須賀に居るんだが、目の前には大きな船体がひとつある。

「ああ、やっと起工したか」

「やっと起工したというか、お前の言う史実より半年位早い」

「まあそうなんだが、戦艦と聞くとつい心が踊ってしまっただけ、それに実物はあまり見てないんだ」

「俺は、伊勢乗り組みになったことがあるが、良いもんじゃねーぞ、暑いし上官がうるさい」

さつきから喋っているこいつは笹島利郎、1話で俺の家に強と…いや訪ねてきた奴のひとりだ、俺の秘密を知る人間は出来るだけ少ない方がいいし、目の届く範囲に置きたい。

それなら護衛兼運転手にでもしてしまおう、と言うわけだ。

「大和型ねえ、これからは空母の時代なんだろ？なんでわざわざこんなどでかいのを造るんだかわからんね」

「理由はいくつかある、一つは海軍内に残る大艦巨砲主義者の要請だ」

「大艦巨砲主義者なんて、そんなやつらのことを聞いてどうする」

「あちらは今の所、海軍の多数派だ、こちらが強硬策に出ればあつという間に潰される可能性が高い、なら出来るだけゴマを擦って穏便に済ませないとな」

「うーんそういうもんかねえ」

「二つ目は、他国に対する牽制だな、今、世界は再び建艦競争に突入した。

我が国も空母中心の建艦計画を立てているだろ？

しかしそうなるとアメリカが黙っていない、空母には空母、と大量の空母を建造する可能性がある、そこで大和型を公表して米国の目を空母からそらす、ダニエルズプラン並とは言わないが、空母そっちのけで戦艦の建造を始めたら御の字だな」

「御の字って、ただそれだけでこんなもん造るか？普通」

「まあ足は速いし対空火器はかなり多めに搭載する上、旗艦設備も充実させるから機動部隊の旗艦としても十分つかえる」

「ふーん、まあそれは一旦置いて……」

「ん？」

「美琴ちゃんは？」

「は？」

「だから美琴ちゃんだよ、横須賀に新設された海軍女子航空学校の、たまに会ってるらしいじゃないか」

「なんでそんな話になるんだ、彼女は都会に馴染めてないから暇な時に案内してるだけだ」

「おや、お前に暇なんてあったのか？それじゃあこないだ家に有った栄養ドリンクもって三菱に徹夜で設計図引きに行ってたのは何奴だろうな」

「な、何故お前がそれを……!!」

「え？マジだったの？」

「……何のことかわからんな」

「いやー、まさか本当だったとはねえ」「ニヤニヤ

「ぐう……!!」

「お前はおしとやかなのに弱いみたいだからな、前の所の奴らはみんな押せ押せだったらしいしな」

「俺はモテた覚えはないんだが……」

「黙れ、リア充爆発しろ」

「？」

「よし、お前は男の敵だ」

「だー！うるさいぞ、この後は予定が詰まってるんだ。さっさと行くぞー！」

「へいへい、わかりましたよ」

役職（前書き）

題名はあれですが、内容は次の話との前後編になります。

役職

「部長、ここのクランクの設置角なんです…」

「うーん、あと0.1度寝かせた方がいい、そこには冷却液が通るはずだ」

「このシャフトの太さはどうしましょう」

「八番だな、そこはある程度太くても問題ない」

「中島飛行機の松下さんから面会願いが…」

「またか、加給器は此方にあるもので十分だ、帰ってもらえ」

「艦政本部から資料が届きました」

「じゃあ二番使って打ち込んでくれ、それとこの資料もついでに頼む」

「やあ、真田だ。」

「今、俺はものすごく忙しい。」

「元々忙しかったが最近は特に。」

「前までは多少無理をすれば1日位は休みを取っていたのだが、ここ
の所それすらもままならない。」

「何故か、」

「この度正式に、」

『陸海軍総合造兵研究部部长』

なる役職に着任する事になったからだ。

これは各軍への開発計画の提示、陸海軍間での装備の共同開発の調整、企業間での調整、さらに独自に装備の開発を行う新たな部門である。

これに伴い、各分野から集められた数十人の科学者、エンジニアなどが部下として加わり、陸海軍から出向してきた武官も纏め上げなければならなくなった。

よって、ここ最近では、艦艇の改修、整備計画をまとめて艦政本部に提出したり。

新型戦闘機のココンセプトがやっと決まったのでエンジン開発に拍車がかかり、雷爆撃機も機体設計がまとまって、細かい改良も同時進行で行われている。

他にも各工廠での艦艇の建造状況、新型戦車の企画書に目を通し、国策会議にオブザーバとして出席する。

……どうやら上は俺を過労死させる気らしい。

正直、今ほどパソコンに感謝しているときは無い。

手回し計算機とか手記で書類作成とか、俺には出来そうにない。

もっとも、忙しくなる前に採用していたJIS（日本工業規格）が無かったらパソコンがフル稼働しても追っ付かなかっただろう。

これのおかげで工廠では作業効率があがったそうだ、そりゃ耗単位でサイズが違う部品を使っていたら管理も大変だし場所をとる。

「部長」

こいつはさつき中島飛行機を取り次いできた奴か？

「面会は断っとけ」

「いえ、そうではなくて」

そういうと花柄の包を渡される。

なんだ？

「美琴さんという方から頑張って下さいと言って渡されました」
「ほう、どれどれ」

中にはおにぎりが四つと卵焼き、おひたしが入っていた。うん、うまそうだ。

「あ！部長またですか！？」

「あのたまにくる子ですよね？」

「ってか部長何人落とせば気が済むんですか！」

「おい！うるさいぞ！これはただのお礼だ、東京見物の時のなぜ俺が誑しみたい扱になってる？」

こちらはともかく、あちらはそんなつもりないと思うんだが。

「しかも自覚なしか」

「ああ、まさに男の敵、笹島さんの言うとおりだな」

「うちの娘の和子も最近しきりに聞いてくるんだ、どうもあちらでは噂が流れているらしいね」

「「そうですかー……、って米内大臣！？」」

「「どうしたんだ？仕事しろよー」」

仕事はたっぷりたまってるんだ。

「やあ」

「って、米内さんどうしてこちらに!？」

「うーん、何故といわれると色々ありすぎて困るが、少々厄介事が出来た。少し来てくれないか」

厄介事？何だろうか、列強が動いたか？それともどこかの派閥がまた懲りずにクーデターでも画策してたか？

「…わかりました」

まさか…

俺が外に出ると、すでに笹島が車を回していた。二人ともそれに乗り込む。

「で、どこへ向かわれるのですか？」

「警察庁だ」

「警察庁？なんでそんな場所に？」

「実はな、千葉の九十九里浜の近くで、住所登録のない家を巡回中の警官が発見した。」
とりあえず中にいた男数名を警察署に連行したんだが…」

「それだけ聞くとただの違法住居ですね」

「はは、そうだな」

「それで、その何が私に関係あるんですか？」

「まあ聞いてくれ、取り調べ中に彼等は口を揃えて『自衛隊』という単語を口に出したんだ」

「自衛隊…！？」

何故その名前が？その言葉が使われるようになるのは少なくとも20年は先のはず…

「警察は軍の組織と判断して此方に連絡を寄越してきたようだ。そのとき君からもらった資料に同じ単語があったのを思い出してね、もしかしたらと思って色々事情聴取させてみたら君に近い者の可能性がある」

「自分の？」

自衛隊の知り合いは何人も居るが、いったい誰だろうか。

「名前は…なんだったかな、とりあえずこちらで身元を引き受けることになったから直接確認するといい」

「はい、わかりました」

しばらくすると。。。が見えてくる。

車から降りると、数名の警官が出迎えてくれた。

「海軍大臣、米内…：様と真田雄二様ですね、どうぞ此方に」

「すまんね」

俺達はさっそく謎の自衛官がいる取調室へ向かう。

「こちらです」

「うむ」

「はい」

あー、緊張してきたな、なんせ此方に来てから初めて俺と同じ境遇

の人達と会ったからな。しかも自分の知り合いの可能性があると来たもんだ、緊張しない方がおかしい。

「失礼します」

だからと言って、ここで引き返すのもあれだ。思い切って扉を開ける。

そこには…

「兄貴？」

「ゆ、雄二か？」

「カツ井うま」

何故か兄妹が居た。

「……………え」

…意味が分からん、読者の方々には意味不明かもしれないが、俺が考え得る中では最も最悪なパターンだ。

とりあえず、お互いの自己紹介を済ませて状況説明。

正直今すぐ帰ってもらいたいけど…。

しかし、紹介を済まさなければ物語は進まない。

まず、逆立ち腕立てをしているチャラ男っぽい男。

「いやあ、まさかタイムスリップだったけ？そんなのに巻き込まれるとはなあ」

真田司郎 24才

三男

所属

陸上自衛隊北部方面隊第七師団

分隊長

性格

能天気、アホ、筋肉バカ

次、椅子に座ってお茶を啜っている厳つい男。

「ふん、連絡を寄越せばいいものを」

真田逸人30才

長男

所属

海上自衛隊第三護衛艦群旗艦くらま

砲雷長

性格

厳格、たまにぬけている。

「無理に決まってんでしょ。あ、カツ井おかわり」

真田香織26才

長女

所属

航空自衛隊南西航空混成団第83航空隊

イーグルドライバー

性格

大食い、楽道家

俺28才

次男

エンジニア

「なんで寄りによってあんたらなんだ…、いや、頼りにはなるが…」

「さあ？」

「久しぶりに休暇が一致したのでな、みなで集まって飲もうかと思
い」

「あんたも呼びに行ったんだけど家の中に入っても誰も居ないし、
帰ろうとしてドアを開けたら九十九里浜の近くだったわ」

「俺は一年以上ここに居るんだが…」

「それで、警察に連れられて外に出たら家はボロ屋になっていた」

「自分が思うに、この世界に全く同じ物は2つ存在できない、だか
ら片方を消して帳尻を合わせたのではないか？」

「それじゃあ俺達の家が2つあることにならないか？」

「それは逆の理論で説明できる」

「じゃあこの一年の時間のズレは？」

「おそらくはこっちとあっちでは時の進み方が違うのだろう」

「うーん、それじゃあ俺達はどくなるんだろうな」

「俺は一年ここにいたが、特に何も無かったぞ？」

「ふむ…、今の所問題ないならいい」

「いいのかよ」

「すぐにわからんことに何時までも時間を使えん、それより今後の
事だ」

「今後？」

「今後って言ったって…」

「ニート？」

「ねーさんは黙っとけ」

「なら…」

俺が米内さんの方を向くと、コクリと頷いてくれた。

「軍にこないか？」

「「「やらせていただきます」」」

掃除（前書き）

最近フライトシムをよくします。

第一次、第二次大戦機や現代機、民間機、架空機、艦艇、陸上兵器と、かなり手広いつていうか手広すぎて選ぶときに迷うぐらいで
（ ^ - ^ ; ）

それで全て無料は学生の私にとって嬉しい限りです。

それと、最近コメディ色が増えてきましたが気にしないでください。
締めるところは締めます（、・、・、）キリッ

掃除

「ああ…、俺のへヴンはどこに……」

前回、兄弟達と合流した俺は、三人を軍に招いた、米内さんは細かい事は週末にでも例の会合を開くからその時にでも話し合おう、と言うことになった。
のはいいんだが……

「ぐだぐだしてないでさっさと掃除してね、兄さんが掃除してないせいで結構埃溜まってるんだから。あ、ポテチみっけ」

「うおー！！逆立ち雑巾がけえ！！」

ガガガガガガガガ！！

「む？こんな所に上物のブランデーが」

「飲んじまいましたよ」

「いけませんよ」

……カオスである。

何故俺がわざわざ午後の仕事を無理やり休んで兄弟＋笹島、美琴さんのメンバーで掃除しているかというと、三人がここに住むことになったからだ。

なぜか、

軍に編入するにあたって、三人の住居について問題が出た。

俺はあの家に住めばいいと言った、軍に入れば否応なくあちこちに

転属する上に、たまに帰ってきてても寝るぐらいしかしないだろう。しかし、この案は三人の猛反対にあい頓挫。その上、米内さん曰わく、

「会合がどう転んだとしても、しばらくは帝都周辺からは動かないと思うよ?。」

とのこと。

そう言われると俺としても仕方なく、本当に仕方なくであるが、この家に住んでもらうしかないと思った。

別にその話を聞いた三人に目で脅されたわけではない、決して、決して!..

「あの、真田さんこれはどこ?。」

「ああ、居間の所に置いといてくれ」

唯一、よく働いてくれるのは美琴さんだ。

香織は真面目にしようとはするが食べ物の誘惑に負けてるし、アホはアホな事してるし、兄貴は隠してあった酒を見つけるし、笹島は飲もうとするし...。

「.....」チラッ

「ん?。」

美琴さんが香織の方を見ている。

「どっした?。」

「……ズルいです…あれだけ食べて全く太らないなんて…」

ああ、香織は1日に余裕で女性の平均の二倍は食うんだが体重は50から上がった事がないらしいからな。

しかも出るとこはある程度は出てる、身長はそれなり、顔も美人な部類だ。

対して美琴さんは綺麗というよりも可愛い部類だ、背は……頑張れ。

「まああれは規格外だ、気にしない方がいい」

「……そうですね、あの人は規格外、そう思うことにします。

あの人は規格外、あの人は規格外、あの人は規格外」ブツブツ

うーん、自己暗示モードに入ってしまった。復旧は暫く無理そうだと、言うことは

「一人でやるのか……」

俺は一人寂しく掃除を始めるのだった……。

半時ほどして、ようやく再起動した美琴と一緒に他のメンバー《アホ》を働かせる雄二の姿があったとさ。

掃除（後書き）

投稿する前に気付いたんですけど、総合PV65000、ユニークアクセス15000を突破していました（・|・;）

このような駄文に本当にありがとうございます（T・T）

旅行？（前書き）

来週テストなので休みます、マジでやらないとヤバイので。

旅行？

俺は今、旅順の造船所に居る。

ここは先週新しく設立された造船所で、各造船所から人員を引き抜き、機材は貴重な独製を使用している。

規模は四万トン級2、一万五千トン級3、五千トン級3、二千トン級4で、現在、拡張工事を終了して七万五千トン級1、五万トン級3、以下多数を持つ呉、横須賀に次ぐ。

現在、旅順はトラックに次ぐ海軍六つ目の拠点として注目を集めている。

とはいってもまだ稼働はしていない。

今日は記念すべき設立最初の建造艦の起工式である。

今日起工式を迎える艦、その名は甲型海防艦31号。

甲型海防艦は現在、通商警護の中核として整備が進んでおり、他にも鎮守府付きの哨戒艦としても使用される予定だ。

今回は視察旅行の一環として来ている。

何故視察旅行なんてしているのか。

「雄二、この後は奉天で一泊して関東軍の視察だったな」

「おー！楽しみだ！87式とか90式しか見て来なかったからな！」

「満州飛行機っていうのも見学してみたいわね」

「あそこは潰したぞ」

「」

こういう訳である。

上の方々曰わく、時空を超えてやって来たお三方を現代に慣らし、国情を正確に理解してもらうには旅行が一番！らしい。こっちは結構迷惑なんだがな、このクソ忙しい時期に二週間も仕事押し付けてきたんだが、休みの分取り返してすらいない……。多分、帰ったら部員全員が虚ろな目をしているに違いない。そういえば、3人の所属がやっと決まった。

兄貴は重巡摩耶の副長。

それに伴い階級は中佐になった。

元々砲雷長だったのである程度の知識はあるだろうし、後は今の艦艇に合わせて知識を修正していけばいい。

将来的には新型艦の艦長辺りにでもなるんじゃないか？

こついう時、巡洋艦と言うのは一通りの装備があるから便利だ。

香織は海軍女子航空学校の教官。

階級は少佐。

現在、女子航空学校は教官が全て男性で女性が誰も居ない、というかそれが当たり前だ。

女性で航空機の知識、搭乗経験が豊富、その上ジェット機に乗っていたとなると、これが適任だ。

現在、陸軍も来年度の設立に向けて動き出している。

士郎は色々メモた結果、とりあえず陸軍の近衛師団が預かるそうだ。連隊長辺りになるまで帰ってくるな、暑苦しいから。

「むー！今馬鹿にされた気がした！」

「気のせいだ」

しかも無駄にカンが鋭い、馬鹿なのに。

「おい、次行くぞ」

「えー、もう行くのー？」

香織がぶーをタシるが、此方は現実を突きつけてやる。

「そろそろ行かないと奉天行きの列車が出るぞ？ここの宿泊所でビミョーな飯食ってかたいベットで寝るのと、奉天の高級ホテルでウマイ飯食って柔らかいベットにダイブするの、どっちの方がいい？」

「ほら！さっさと移動するわよ！」

旅行？（後書き）

ドック数はわりと適当、知らないの。

ちなみに、いまの奉天中心部にあるホテルは当時、自分の曾祖父の家だったそうです。

ホテルに使われるほどデカイ家っていったい…。

祖父は今年80？になりますが、今でも当時の暮らしを語ってくれます。

1945年のソ連の対日参戦で日本の京都に命からがら引き上げた後、中華学校や、台湾の日本人学校の教師をしていたそうです。

帝国陸軍の苦悩（前書き）

今回は少し時間が飛びます。

別にぐだぐだ書くのがめんどくさいとかそついうわけではありませんせん、絶対、絶対！

後、久しぶりですから投稿が遅くなりました、すみません。

帝国陸軍の苦惱

昭和一四年六月

赤坂、統合参謀本部内陸軍部会議室は険悪な空気に包まれていた。統合参謀本部は、ただの連絡組織の意味合いが強かった大本営に変わり、陸海軍の上位組織として昭和一三年に設立した。

統合参謀本部は、今まで連絡組織的な存在だった大本営に比して大きな権限を持ち、作戦立案、軍備計画作成、両軍の人事管理等の、陸軍省、海軍省に迫る権限を持つ。

もともと、これは国防省が発足するまでの過渡的な処置で、発足しほしい、権限を移譲する予定である。

また、陸海軍総合造兵研究部も直轄組織として組み込まれている。入居しているのは今年二月に完成した通称『丁』と呼ばれる庁舎で、通称は完成直前に訓練で偶然上空を飛行していた陸軍機パイロットが「丁に似てるな」と言ったことから始まる。

丁の一の部分は右を軍令部から改変された海軍部、左を参謀本部から改変された陸軍部と割り振られており、？の部分は両者の共有施設、つまり大会議室や食堂、統合作戦室等で、果ては正面玄関がある。

現在は業務拡大によって人員が溢れ出しているため空き地にも仮庁舎を構えている。

今、その会議室では二人の将官が面会していた。

一方はまるで相撲取りのような巨漢、もう一方は痩せ形の丸眼鏡をかけた参謀タイプだ。

山下奉文少将はで机を叩き吼える。

「戦車は数を揃えなければ意味がありません！それを中隊規模での小規模運用ですと！？」

冗談も大概にしていたきたい！」

陸軍部次長多田駿中將は渋り顔で答える。

「そうは言ってもね、戦車は高いのだよ？山下君」

「しかしだからといって各師団に一個中隊は無いでしょ！」

これでは戦車の機動力を生かせない！せめてそれらを集めて機甲師団の編成を！」

「その案も無いことはないがね……」

「？では何故ですか？」

「そもそもシベリアや支那大陸、南方、本土は戦車の機動力を生かす場所が限られているのだよ。」

それに機甲師団を作った場合、それに追従する歩兵部隊も自動車化を行わなければなるまい。そのような予算は今の陸軍にはとてもではないが無いのだよ。」

私とて予算さえあれば賛成なのだ」

多田の言っていることは間違いではない、予算はクーデター時の予算圧縮によって未だ苦しいままなのだ。

二個師団を削減してもなお、切り詰めなければならないほどにだ。戦車、航空機、小銃等の装備こそ海軍との共同開発でなんとかやっているが、金食い虫の戦車を大量発注出来るほどの余裕はない。

それをよくわかつている山下はそれ以上詰め寄ることは出来ない。仕方無く、別の話にずらすことにした。

「では八八式野戦高射砲を転用した戦車の開発はどうなっているのですか？あれは砲を改めて作らなくていい分、普通の重戦車よりい

くらは安上がりと聞きましたが」
多田はうーんと唸りながら答える。

「装甲や砲塔はともかく、どうも足まわりがな、あと砲塔自体も問題がないわけではない」

それを聞くと山下は肩を落とした。

「そうですか……」

「うむ、車体がどうしても強度不足でな、今は砲塔の軽量化で何とか出来ないか探っている。

なんせ搭載予定のエンジンが海軍の10式戦から転用の500馬力、20tそこらなら高速を出せるかもしれないが全備重量30t近くある化け物だ、少しでも軽量化せねばな」

「砲塔を軽くするにも限度があるでしょう、装甲を削るわけにもいきませんし、何かいい考えは無いのですか？」

すると多田は周りを見渡して山下に顔を近づける。

「実はな、本当ならまだ部外秘なんだが……」

「何でしょう？」

「造兵研究部から上がってきた新型装甲を使えば強度をそのままに重量が三分の二になるそうだ」

「三分の二！？」

「し！部外秘と言っところうに」

「す、すいません…」

山下が肩を竦めてしまう。

「性質の違ういくつかの合金を合わせることによってーどうしたらー
うたら言っておった」

「しかしまた造兵研究部ですか、優秀な技術者が揃ってるとは聞いたことはありますが…」

「なんでも部長が切れ者だとかで、確か海軍出身だったかな、ここ数年以内で、新しく開発された装備は全部彼が関わっているとか」

「となると、去年制式化した九八式も？」

「どうかね？使い心地は」

「うーん…あの中戦車は優秀ですよ？確か、速い、砲も長砲身57mmで高火力、装甲も重量の割には厚めで整備性も良好らしいですし。」

「ま、問題をあげるとしたら値段が少々高めと言っているところですかね、それでも八九式の四割増でおさまっていますし」

「ふむ、まあ優秀なら問題ない、うちも四の五の言ってもらえんからな」

「全くです」

さっきまで険悪だったはずの会議室には重苦しい空気が流れ始めて

いた。
陸軍の苦悩の日々はまだまだ続く。

さーで、お待ちかねの外交パートですよ〜（前書き）

えー、先週は投稿できずほんとうすみませんm（ー）m

ここ数週間物凄いスランプで、書こうにも遅々として筆が進まず、あれよあれよというまにストックを消耗しつつ、ついに先週分で弾切れになりました（< >）

そんな中で書いた話なので誤字脱字矛盾検証不足等々が見られるかもしれませんが、生暖かい目で見ると幸いです。

次話も完成し次第投稿しますが、一週間で投稿できる可能性は真に低いです。+1、2週間は待つていただく事になるかと…

最後に、本当に申し訳ございませんでしたあ！！

さーて、お待ちかねの外交パーティですよ〜

威海衛沖2km

重巡高雄艦橋

「右舷中華民国艦、距離500…450近づきます」

艦長の真田逸人大佐は、お世辞にも整備が行き届いてるとはいえな
い中華民国艦を見た。

その姿が不憫に思えてしまう。

もっという国に生まれればよかったな。

そう思ってしまうのだ。

「針路そのまま、速度に注意、緩衝材確認」

「了解」

とにかく、目の前の任務を果たすことが先決だと思い直す。
とある要人を送り届ければ横須賀に帰って3日の休暇を取れる。

(確か、雄二達も休みのはずだからどこかに行くのもいい)

そう考えていると、後ろから声がかかる。

「すまないな、本来なら今頃休暇中だったのだから？」

「いえ、休暇はせましましたから大丈夫です、松岡外相」

「そうかね？しかし悪いことをしたのは確かだ」

「そう思うなら今回の交渉はしっかり成功させてきてください、そうすれば許しますよ」

「わかったよ」

松岡がニコツと笑うと、艦橋に水兵が上がってきた。

「艦載艇の準備が整いました、直ちに移乗願います」

「うむ、じゃあ行ってくるよ」

「はっ、ご健闘を祈ります」

松岡が水兵に続き艦橋をあとにする。

「軍事同盟、か」

逸人がポツリと漏らした言葉は、周囲に聞こえることなく消えていった。

松岡は乗艦すると、副長を名乗る男に案内され、会議室に向かった。中に入ると、中国人らしい服を着た男が応接セットに座っていた。

「お初にお目にかかります、松岡です」

「いや、こちらこそ」

中に居た人物の名は蒋介石。

中国国民党総統で、史実では毛沢東らと共に抗日統一戦線を構築。

第二次世界大戦後、中共内戦に敗れ台湾に逃れている。

松岡は蒋介石の前に腰掛ける。

二人は一通りの社交事例を交わしたあと、本題にうつった。

「しかし、まさかあなたが此方につくとは思いませんでしたよ、蒋介石閣下」

「ははは、こちらも驚いている。そちらからこのような条件を提示されるとはね」

「我々は中国を憎き敵ではなく、良きパートナーとして付き合っていきたいのです」

「ほう、しかし我々はそちらの仮想敵国であるソ連とは対立関係にあるものの、最近関係が険悪になりつつある米国とは強い結びつきがある」

「そのようなことは関係ありません、問題は最後にどちらを取るかです」

松岡は蒋介石の目をしっかりと見つめると、諭すように口を開いた。

「正直に申し上げて貰いたい」

「何かな？」

「あなたは米国をどう思っているのですか？個人的な考えをお聞かせ願いたい」

蒋介石は目を見開くと、一気に緊張した面持ちになった。

「自分は…米国は中国を踏み台としか見てないと考えている…」

「やはり…」

「うむ、あれは化け物だ、世界中の市場を食い荒らし、開拓という名の侵略をおこない、国民はそれが正義だと思っている。その矛先が次はアジアに向いている。その土台に我が国を選んだ。それを驚異と呼ぶすなんと呼ぼうか」

「我が国も同じです。米国がアジアを狙ったとき、アジア唯一の列強で、シナ海に接している我が国は邪魔でしかありません。現に、米国は外交圧力を強めつつあります」

「加えて、北にはソ連、内には紅軍…か」

「どうでしょう、軍事同盟と銘打ってはいますが、それ以外でも我が国及び、満州国はそちらへの支援は惜しみませんが…」

蒋介石は目を閉じ、考えるそぶりを見せる。
しばらくすると、腹を決めたとばかりに松岡を見る。

「……此方の反日勢力の一部が反発する可能性はあるが、それは自分が抑えよう」

「！？では…！」

蒋介石はにっこりと笑った。

「うむ、これからはよろしく頼むよ」

「あ、ありがとうございます…！」

数日後の新聞の見出しには、次のような言葉が踊っていた。

『日中手を結ぶ』

『祝、同盟締結』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4514t/>

新しい大日本帝国史

2011年10月30日00時04分発行